

令和元年6月18日現在

機関番号：14602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26770097

研究課題名(和文)菅原為長に関する資料および作品についての基礎的研究

研究課題名(英文)Fundamental Study of Materials and Works on Sugawara no Tamenaga

研究代表者

中川 真弓 (NAKAGAWA, Mayumi)

奈良女子大学・文学部・特別研究員

研究者番号：20420416

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、鎌倉前期に活躍した菅原為長の作成した願文について注目し、同時代の人物たちの作品を含めて考察をおこなった。

『菅芥集』や『本朝文集』所収の願文では、為長が用いた文章表現や、願文から知られる歴史的事実について指摘した。また、石清水八幡宮権別当田中宗清に依頼され執筆した願文では、早世した息子章清に対する宗清の思いや、宗清が造らせた仏像や厨子にまつわる事実が明らかとなった。さらに、松花堂昭乗ゆかりの古筆切が、宗清の依頼により藤原定家が書いた仮名願文であることを発見した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『続群書類従』に「願文集」という書名で所収されていた史料が、菅原為長による『菅芥集』という作品であったことがわかった。具体的に各願文を読解すると、鎌倉初期に活躍した人物たちのこれまで知られてこなかった事跡が明らかとなった。また、石清水八幡宮権別当田中宗清が為長を含む文人たちに依頼した願文群の存在を指摘し、『続群書類従』で作者不詳とされていた仮名願文が藤原定家のものであることを発見した。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study was to research the 'ganmon' written by SUGAWARA no Tamenaga and others. SUGAWARA no Tamenaga, a Confucian scholar in the early Kamakura period, left many works of ganmon. We focused on the Tamenaga's works included in "Gunsho ruiju" and "Honcho bunsyu", and examined Tamenaga's style of textual expression and the historical facts in the ganmon.

TANAKA Sohsei, the depty Betto of Iwashimizu Hachimangu Shrine, asked Tamenaga to write the ganmon for the memorial service of Sohsei's lost son Shusei. That ganmon describes Sohsei's grief for his son's death and involves previously unknown facts about the Buddhist image and altar.

This study revealed that the pieces of excellent classical calligraphy which had been in connection with SHOKADO Shojo were 'Kana ganmon', and the author was FUJIWARA no Teika.

研究分野：中世文学

キーワード：菅原為長 願文 『菅芥集』 田中宗清 藤原定家

1. 研究開始当初の背景

菅原為長については、山崎誠氏によって夙に伝記的考察がなされている(「菅大府卿為長伝小考」『国語国文』第539号、1979年)。また、『文鳳抄』『管蠡抄』などは翻刻・出版されて研究が進められている(本間洋一『歌論歌学集成 別巻2』三弥井書店、2006年。山内洋一郎『本邦類書玉函秘抄・明文抄・管蠡抄の研究』汲古書院、2012年)。為長の著作物を一覧すると、上記2点を含め啓蒙書や手引書の類が多く、その一方で、彼自身による詩文の実作はあまり伝わっていないと指摘されている。

しかしながら、申請者は、本研究開始以前に、『続群書類従』所収の「願文集」が本来は『菅芥集』と呼ばれていた作品であり、作者を菅原為長に比定できることを明らかにした。この『菅芥集』および断片的に残されている為長の詩文を考察すれば、為長の文筆活動あるいはその周辺を明らかにできると考えた。

『菅芥集』の伝本としては、主に修善供養の願文を収めた醍醐寺本・東寺観智院本・宮内庁書陵部本等や、追善供養の願文を収めた国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵本の存在が知られる。『菅芥集』に所収される願文群は、歴史上にも重要な人物の伝記的事項、また寺院の状況などを知ることのできる情報を多分に含んでいる。しかし、従来この作品は『続群書類従』のテキストのみしか知られていなかった。そのため、これまでの諸研究は、『続群書類従』編纂時の誤字・脱字をそのまま利用せざるをえなかった。『続群書類従』を遡る諸伝本を検討するならば、新たな歴史的事実も指摘することができると考える。

2. 研究の目的

本研究は、中世初頭に活躍した文章博士菅原為長(1158~1246)の事績と、彼が成した作品あるいはその断片を整理・考察することで、その著述活動の全体像とらえていくことを目的とする。また、五代の天皇の侍読を勤め、九条家の子弟に対しても学問の師となった為長の立場を踏まえ、彼が果たした役割について新たに捉え直す。

特に為長が多く執筆した願文作品については、その内容を読解し、歴史的な一次史料として活用できることをめざすとともに、彼の願文製作活動の背景について明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 菅原為長の願文集であることが明らかとなった『菅芥集』は、伝本として、主に修善供養の願文を収めた醍醐寺本・東寺観智院本・宮内庁書陵部本等や、追善供養の願文を収めた国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵本の存在が知られる。『菅芥集』に所収される願文群は、歴史上にも重要な人物の伝記的事項、また寺院の状況などを知ることのできる情報を多分に含んでいる。本研究では、この『菅芥集』所収願文を、為長の執筆活動の一つであるという面と、願主および寺社の情報を伝える歴史資料としての面から考察する。

(2) 『菅芥集』以外にも、菅原為長が執筆した願文は諸作品や資料の中に確認される。それらの願文を収集し、各願文の内容について取り上げる。また、為長の作品が、他の願文作者とともに一群となっている場合、その群がどのような意味をもつのかを考える。具体的には、石清水八幡宮第34代別当田中宗清が依頼して作られた願文群が存在する。この願文群の中で、為長は数首の願文を作成している。為長以外の作品についても着目し、考察を加える。

4. 研究成果

(1) 報告者が以前から調査してきた国立歴史民俗博物館蔵『菅芥集』を取り上げ、その中に所収される願文数首を考察した。特に、国立歴史民俗博物館蔵『菅芥集』の半分を構成する中原広季追善願文群については、以前にも拙稿の中で触れていたが、今回詳細に論じることで、中原広季の子である大江広元や藤原親能といった、鎌倉幕府の草創期に活躍した重要人物たちの行動について明らかにすることができた。また、広季の子で広元や親能の兄弟にあたる人物が巖島社神主を務めていた事実を『菅芥集』所収願文によって指摘することで、佐伯氏による神主職を藤原親能の子孫が務めるようになる巖島神社史を考える上でも重要な視点を提示できたと考える。願文は彼らの活動に関する一次史料ともなるものであり、これらの願文製作に対する考察を通じて、菅原為長自身の文学活動の一側面についても言及した。

以上の考察内容について、軍記と語り物研究会大会にて口頭発表をおこなった(発表題目:「国立歴史民俗博物館蔵『菅芥集』所収の中原広季追善願文について」、四天王寺大学/大阪府藤井寺市、2014年8月)。さらに、口頭発表と同題にて『軍記と語り物』51号に投稿し、採用された(2015年5月刊行予定)。

(2) 菅原為長が執筆した『本朝文集』所収「石清水八幡宮権別当田中宗清亡息追善願文」を中心に、田中宗清が当時の文人たちに依頼して作成させた願文群の調査をおこなった。まずは石清水八幡宮が所蔵されている史料を閲覧調査し、次に、山外に流出したと考えられる願文を探

査した。その一つが京都大学附属図書館に所蔵される藤原孝範願文であり、この願文を考察することで、田中宗清の伝記的事実や子どもの実名などが明らかとなった。

田中宗清を願主とする願文群は、その内容を詳細に見ると、大きく二種類に分けることができる。為長が執筆した願文は、現在石清水八幡宮には所蔵されていないが、重要文化財に指定されている「田中宗清願文」二巻と同じく、息子の章清を追善する願文のグループに分類される。それらの考察の結果については、佛教文学学会大会（2015年9月、近畿大学）にて口頭発表した。

また、調査の過程で、山形市の寺院に伝わる藤原定家筆の願文の存在が知られた。この願文については佛教文学学会の発表でも取り上げたが、山形県の重要文化財に指定され、ホームページ上でも紹介されているものである。定家については天理図書館に「願文案」があることが知られ、山形市の定家願文も従来それと関連づけられてきた。しかし、願文を精査すると、「願文案」とはまったく別の内容であることが明らかとなった。

(3) 石清水八幡宮第34代別当の田中宗清が、権別当の時期に当代の文人・能筆に依頼して作成させた願文類について考察した。それらの願文類は、目的によって二つの群に大別することができる。一つは宗清の所望を祈願したもので、もう一つは長男章清の追善のためのものである。為長の執筆した願文を含む後者の群については前年度に考察を加えており、本年度は前者の願文群に焦点を当てた。

前者の群のうち、天理図書館所蔵の藤原定家筆「石清水八幡宮権別当田中宗清願文案」は、貞応二年（1223）定家が宗清に依頼されて執筆したものである。また、この「願文案」をもとに書かれたとされているのが、山形県指定有形文化財の古筆切「藤原定家筆願文」である（『山形県の文化財』1990、『山形市の文化財』2002）。ところが、古筆切の内容は「願文案」の本文と全く一致していない。

報告者は、この古筆切が、大正六年（1917）の「赤星家所蔵品入札」に出品された一点であること、さらに出自を遡ると、かつて松花堂昭乗が所持した「八幡名物」のうちの「大願書」であることを確認した。また先行文献では、別ルートで伝来した古筆切「小願書」とともに従来52行にわたっていたものが、後世に分割され、前半35行の大願文、後半17行の小願文となったと解説されている。しかし、実際は「小願書」が先で、「大願書」がそれに連続するのが本来の姿であること、古筆切の本文が、『続群書類従』所収「嘉禄元年宗清法印勸進文」の一部と重なることを指摘した。

以上の調査と考察から、これまで不詳とされてきた「嘉禄元年宗清法印勸進文」の作者が藤原定家であったことを明らかにし、中世文学学会秋季大会にて発表した。

(4) 『菅芥集』所収願文の中には、書写山円教寺を舞台としたものがある。紀州地域学共同研究会および和歌山大学・地域活性化総合センター・紀州経済史文化史研究所の共同主催（国文学研究資料館歴史的典籍NW事業）による2017年度公開研究会「霊験寺院の書物と言説 西国三十三所霊場を中心に」（於四天王寺大学あべのハルカスサテライトキャンパス）にて、「書写山における性空上人伝の受容と展開」という題目で口頭発表をおこなった。

書写山円教寺の開山性空上人はその生年が明らかでなく、寛弘四年（1007）に亡くなった際の年齢についても不明であることから、後世において幾つかの説が存在することになった。在世中に書かれた『朝野群載』巻二所収「性空上人伝」には、当然ながら没年の記事はなく、没後まもない寛弘七年（1010）に遺弟延照によって書かれた『一乗妙行悉地菩薩性空上人伝』にも没年の年齢は記されていない。諸説ある中で、「九十八歳」説が正統なものとして書写山で受け継がれていくことになる過程を、鎌倉時代初期の勸進文などの資料を取り上げ考察した。また、同資料からは、花山法皇とゆかりのある性空上人絵像の副本が作成されていることが知られる。絵像の原本は円教寺の「宝蔵」に納められたとみられるが、明治三十一年（1898）の火災により焼失した。現在は江戸時代に作られた模本（の模写本）が円教寺に伝わるが、発表では、『書写山日記』を編纂した書写山学頭快倫（1576～1644）の関与があった可能性について言及した。以上の口頭発表の一部を、特別展図録『紀州地域と西国順礼』（紀州経済史文化史研究所編、大橋直義・和歌山大学准教授監修）にコラムとして成稿化した。

(5) 石清水八幡宮第34代別当の田中宗清が、菅原為長をはじめとする当代の文人に依頼して作成させた願文類について考察をおこなってきた。その一つに、天理図書館所蔵の藤原定家自筆「石清水八幡宮権別当田中宗清願文案」（新天理図書館善本叢書6『定家筆古記録』所収）がある。この資料は、貞応二年（1223）定家が宗清から依頼されて執筆したものである。さらに、この「願文案」の清書とされてきたものとして、山形県の重要文化財指定を受けた古筆切（個人蔵）がある。しかしながら、その内容は、天理図書館蔵「願文案」の本文とは全く一致していない。

報告者は、「定家の願文 「石清水八幡宮権別当田中宗清願文案」と「八幡名物」古筆切をめぐって」（『中世文学』63、2018年6月）において、この古筆切が、大正六年（1917）の「赤星家所蔵品入札」に出品された一点であること、さらに、松花堂昭乗が所持していた「八幡名物」のうち、「大願書」と呼ばれたものであったことを確認した。『山形市の文化財』（1990）・『山形県の文化財』（2002）では、別のルートで伝来した古筆切「小願書」と合わせて従来52行だ

ったものが、後世に分割され、前半 35 行の大願文、後半 17 行の小願文となったと解説する。しかし、実際は「小願書」、「大願書」の順に接続するのが本来の姿であり、これらの古筆切の本文が、『続群書類従』神祇部所収「嘉禄元年宗清法印勸進文」の一部と重なることを指摘した。以上の考察の結果から、これまで作者不詳と見なされてきた「嘉禄元年宗清法印勸進文」が、藤原定家によるものであったことを明らかにした。

さらに、上記の願文案や古筆切を含めた田中宗清関連の願文群について、総体的に俯瞰した考察をおこない、「石清水権別当田中宗清関係願文考」(『語文』111、2018 年 12 月)にまとめた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

中川 真弓、定家の願文 「石清水八幡宮権別当田中宗清願文案」と「八幡名物」古筆切をめぐって、『中世文学』63、中世文学会、査読有、pp68-75、2018

DOI https://doi.org/10.24604/chusei.63_68

中川 真弓、国立歴史民俗博物館蔵『菅芥集』所収の中原広季追善願文について、『軍記と語り物』51 号、軍記・語り物研究会、査読有、pp20-30、2015

中川 真弓、石清水八幡宮権別当宗清亡息追善願文考 菅原為長の『本朝文集』所収願文を中心に、『詞林』56 号、大阪大学古代中世文学研究会、査読無、pp1-11、2014

DOI [info:doi/10.18910/67670](https://doi.org/10.18910/67670)

〔学会発表〕(計 5 件)

中川真弓、中世金剛寺僧が書写した摘句集 金剛寺蔵 無名仏教摘句抄 の性格、説話文学会・平成 30 年度 4 月例会、2018

中川真弓、書写山における性空上人伝の受容と展開、紀州地域学共同研究会・和歌山大学地域活性化総合センター紀州経済史文化史研究所共同主催公開研究会、2017

中川真弓、定家の願文 「石清水八幡宮権別当田中宗清願文案」と「八幡名物」古筆切」をめぐって、中世文学会大会、2016

中川真弓、石清水権別当宗清願文考、仏教文学会大会、2015

中川真弓、国立歴史民俗博物館蔵『菅芥集』所収の中原広季追善願文について、軍記・語り物研究会大会、2014

〔図書〕(計 5 件)

中川 真弓、「書写山における性空上人の「新影」」、和歌山大学地域活性化総合センター紀州経済史文化史研究所編『紀州地域と西国順礼』、pp7-8、2017

後藤昭雄・仁木夏実・中川真弓編『天野山金剛寺善本叢刊』第一期第一巻、勉誠出版、2017

仁木夏実・中川真弓「無名仏教摘句抄 影印・翻刻・解説」、荒木浩・近本謙介編『天野山金剛寺善本叢刊』第一期第二巻、勉誠出版、2017

中川 真弓、「慶政の夢 造寺造仏と夢をめぐって」、『夢みる日本文化のパラダイム』(荒木浩編、法蔵館)、pp275-295、2015

中川 真弓、「『宝物集』往生人列挙記事と道命阿闍梨」、神戸説話研究会編『論集 中世説話と説話集』、和泉書院、pp151-175、2014

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。